

II

凡 例

- 一、以下に収録した「日本無政府共産党テーゼ」、「プロレタリアの戦略戦術」は、執筆者（相沢尚夫）の校訂をへて、海燕書房編集部が現代かなづかいに改めたものである。
- 一、いずれも実物はすでに失われたものとみられ、テキストは、前者は文部省思想局「叢報」第四十一号、後者は司法省刑事局「思想月報」昭和十一年四月号に収録されたものによった。
- 一、「日本無政府共産党テーゼ」が秘密出版であるのに対し、「プロレタリアの戦略戦術」は一応公刊を目指したもので（直ちに発禁となった）、若干の伏字があるが、収録に当たりこれをすべて起こした。伏字の大半は、「×命」のように容易に判読できるもので、収録に当たり特にその個所を明示することはしなかった。
- 一、なお注は、すべて原注である。

日本無政府共産党テーゼ

(一) 最高の理想社会としての無政府

私有制の基礎の上に立っている資本の搾取に対する労働の反抗は、革命的たると改良的たるとを問わず一切の社会主義運動の出発点であつた。^(註一)

フランス革命における革命思想と民衆の行動との間から発生し^(註二)最初サン・シモン、フーリエ、オーウェンの三人の代表者を持った社会主義は今日に至るまでの発展過程において二個の潮流に区別されるに至った。一つは国家を理想とし他は無政府を理想とするのである。この両者は等しく資本主義の打倒を意図するにもかかわらず、決定的な対立を続けて来ているのは、「国家」に對する両者の認識の相違に起因しているのである。この決定的な対立は、その対立の裡にいずれ

が資本主義を打倒し、労働者の解放を約束する真の社会主義であるかを示しているのである。^(注3)

社会主義は資本主義の内包する諸矛盾と科学の発展とによってその行動と理論とを作りあげて来たのであり、今日もまたその基礎によって発展しつつあるのだ。^(注4)

現実の社会が富める者と貧しき者と、一切を私有する者と労働力以外の何ものをも持たない者との二個の集団に大別されていることを否定する者はない。資本家といえどもこの現実を否定し得ないのである。この事実から無政府主義者は次のごとく主張する。

富める者、生産手段の私有者資本家が、貧しき者、労働力を売らざる他は生きることすらなし得ない者、労働者農民を搾取し、彼らの私有彼らの資本家的搾取を確保し得る最大の要因は、彼らがその手中に国家権力を握っているがために他ならない。なぜならば政治は経済の反映であり、国家強権が存在するのは、その社会の経済組織のためなのである。もし生産手段が共有となり、生産物が共産となったならば、すなわち搾取が消滅し万人がその生存を保証され能力に応じて働き必要に従って消費する自由を獲得したならば、今日行なわれるごとく個人間の生存競争は消滅し相互扶助が最も表面にまで現れ、今日のごとき生産物が人間を支配するのではなく、逆に人間の生産物に対する支配が行なわれたならば抑圧はその存在の理由を失い、強権による強制は失われ、個人の自由が獲得されることを何人も否定し得ないであろう。

「搾取なき社会は共産社会であり、共産社会は無政府である」とはサン・シモンもクロポトキンもマルクスも述べているのである。而してこれが世界的に拡充されたならば国境も民族的対立も消滅するのは明らかである。それ故に国家を打倒し抑圧をとりのぞき無政府を建設することは

われわれが今日われわれの持っている限りの科学の成果の総合による最高の理想なのである。これが理想であるのは一定の条件の下においては存在し得ることだからである。それは後章にて述べよう。

これに反して国家は、経済的不平等が存在し階級的抑圧が必要であるがためにかかる社会組織が存在するために存在するのだ。だから国家とは階級的抑圧の機関なのである。^(注5)

資本主義国家は資本家の労働者抑圧の機関なのである。そこで前述のごとく経済的搾取はその存在を確保するために常に抑圧を必要とするのである。そして抑圧の機関は富める者と貧しき者とが共に存在する社会においてはすなわち階級社会においては常に存在を続けるのである。

国家はその形態を色々に変えて来た。人類が原始共産社会から私有制の社会にうつった時以来その経済組織は色々に変化して来たが、その基礎の上に常に色々な形態の国家強権は経済的な支配階級的手中に握られていたことを教えている。典型的なもののみ挙げれば、奴隷制の上に立った古代国家、農奴経済を支配した封建的貴族の専制国家、資本主義の資本家的近代国家等々の歴史はこれを示している。^(注6)

国家社会主義者は無政府主義に反対して「国家は人類の到達し得る最高の社会形態である」と主張する。その第一の理由は人間は何らかの強制によらなければ互に闘争し、社会は混乱に陥ること、すなわち無政府は無秩序、混乱を意味するといふにある。第二の理由は国家が存在していても搾取なき社会はあり得るといふのである。

第一の理由は「国家なき社会は盗賊の巣と化してしまう」という支配階級の愛好する言葉と同

一である。クロボトキンはその幾多の著書において、すなわち『相互扶助論』『パンの略取』等において徹底的にこの珍説を打破してしまった。

生物の進化の重要な要因は相互扶助である。人間が自然の脅威と闘い他の生物と闘い勝利し得たのは人間において社会性が最も発達していたからである。社会生活それ自身、一の相互扶助であり知識の拡充もそれである。今日、われわれの間に見られる個人間の生存競争は、資本主義経済の無秩序の反映であって生産が社会化すれば、この競争は失われ、相互扶助が表面に現われることを疑うべくもない。なぜなら今日においてすら相互扶助の動向によってのみ社会は維持されているからである。国家なき社会が混乱に陥るのでなく「混乱せる社会にのみ国家が存在する」のである。

そしてまた社会統計学者はわれわれに犯罪の大部分は財産的なものであり財産的犯罪はその大部分貧困に起因すること、すなわち私有制の上に立つ資本主義の矛盾の曝露である事を教えている。このことは財産的犯罪 \parallel 犯罪の大部分 \parallel に対しては、強権による強制が根本的対策でなく、社会の経済的条件をあらゆる人々に対して良好にすることによって防止し得るのみであることを示すのだ。

もし社会の成員のすべてに、その生存を保証すべき社会が建設されたならば、すなわち共産制においては何人も盗賊となる必要を感じないことは当然でありそれ故に混乱、無秩序は発生せず抑圧すべき何ものも存在しないのである。すなわち国家は最高の社会形態でなく、社会に富める者と貧しき者とが存在し、その間に闘争が行なわれ、それ故に混乱しているが故に存在するのである。

ある。国家は混乱を防止するものでなく、むしろ混乱、無秩序そのものを示すのである。

人間性を悪人であると規定することも、善人であると定めることも等しき誤りであって、それは社会の諸条件によってのみ人間は善にも悪にもなるものである。そこで国家社会主義者は国家の必要を資源の問題と結合するのである。

これは人間の生産力発展のテンポは人口増加のテンポには絶対及ばないと主張したマルサス主義と同一論拠によるのであるが、マルサスはその観察した資本家的社会の生産力が資本主義的諸条件によって幾十分の一に抑圧されているという重大なる点を見落としたことによって誤っていた。なぜなら資本主義的生産は利潤追求のための生産であるからである。そのために資本家は自己の利害によって生産力を高めたり低めたりするからなのである。

われわれは後章においてアナーキーが理想社会でありそれ故にその実現には可能なる諸条件が存在し、その第一のものとして豊富なる生産の必要を述べるべきであろうが、豊富なる生産を可能とするものは第一にその妨害たる資本家的支配の打倒を必要とするのである。それ故に資本家的支配を打倒することは、生産力を発展せしむべき最良の条件をわれわれが獲得することであり、マルサス主義の打倒を意味するのである。

国家社会主義者の第二の理由は彼らの主張によれば搾取なき社会とは生産が国家のために計画的に行なわれる社会を意味する。すなわち一切の生産手段が国有とされ国家はその生産に反対する者への抑圧のために存在するというのである。この主張はある者はナチスを、またある者はイタリヤの組合国家を、そしてまた他のあるものはソヴェートの現在の国家形態を基礎として主張

しているのである。しかし、ナチス・ドイツやイタリアの組合国家が搾取なき社会とは何人も言
い得ない。金融資本は国家資本と結合して全産業を支配しているのである。失業者は増加してい
る。ドイツ、イタリアでも生産手段は決して国有とされてはいない。資本家はその私有財産を暴力
による強制以外には放棄しないのである。

ソヴェートもまた私有制の社会であり富農と私的商業とが抑圧されつつも存在し、その限りに
おいて搾取なき社会ではない。これらの現実からは搾取なき社会においても抑圧が必要であると
の結論は出て来ないのだ。むしろ逆に搾取の存在する社会なるが故に抑圧が存在するという結論
のみが可能である。

またある者はレーニンを引用しつつプロレタリア独裁が共産制に移るその境界線における国家
は、搾取なき社会における抑圧を示すと主張するのである。そしてかかる国家を理想とするので
あるが、これは最も衰弱せる国家であり、国家の機能を失わんとしている国家である。

かかる機能を失いつつある国家が永久にその支配権を維持しようとするならば民衆はそれに反
対するであろう。なぜならその社会に国家の必要が次第になくなりつつあることを示しているか
らである。

そこで国家社会主義者の主張は、国家を最高の社会形態なりとする限り、資本主義がその内包
する諸矛盾とそのため起こる資本主義打倒のための闘争とによって必然的に崩壊し、かつその
後に来るものは階級なき搾取なき社会に向かって進むものであることを立証する物質的諸条件の
存在に対して盲目であると結論して誤りないであろう。（これについてはより詳細に後述するで

あろう）

無政府を最高の理想と規定しながらマルクス主義の誤謬はプロレタリア国家を主張するのに次
のごとき基礎に立つからである。

唯物論的社會改造の原理は、人間社會が不幸であるのは人間が悪いのではなくて社會の制度や
組織が悪いからこれを變革しようとするのである。しかるにもし現在の資本主義社會の槓杆たる
國家や權力をプロレタリアが行使すれば抑壓や搾取を伴わずして解放の要具となるというなら、
それは「組織や制度が悪いのではなくて人間が悪いのである」と言う唯心的坊主主義に陥るより
外はない。何人が行使しようと國家の權力そのものの機構は少數者による多數者の抑壓、支配を
意味するのである。

プロレタリアの解放は政治や權力の主權の交替や變更が目的ではなく、その廃止であり、これ
に代わる自治の制度と組織以外にあり得ない。（この点については後章で詳述するであろう）

それ故に無政府主義のみが唯一の社會主義なのである。なぜなら無政府主義のみが解放とは無
政府共產の建設にあると主張するからである。無政府主義はその出発の当初から今日に至るまで
の闘争の過程において自らの理想をつくり上げた。「もしそれが無意識であり、もしそれが決定
的な具體的目的を持っていないならば、いかなる闘争も成功することは出来ない。もし人々がそ
の破壊にまで至る闘争の間に、そして闘争そのものの間に破壊さるべきものの代わりにならうと
しているものを、すでに自ら決定していなかったならば、現存するいかなるものの破壊も不可能
である」（クロポトキン『近代科学』）

それ故に今日における無政府主義者の理想は次のごときものである。そしてこの理想を一定の条件の下においては実現し得ると主張するのである。

- 一、権力政治の撤廃
- 二、完全なる自治制の確立
- 三、私有財産制度の廃止
- 四、生産手段および土地の共有
- 五、賃銀制度の撤廃
- 六、労働者農民の生産管理
- 七、教育文化の享有
- 八、人為的国境の撤廃

(二) アナーキー実現のための諸条件

無政府主義者はこれらの理想を歴史的、経済的、人類学的考察(注7)のなかから導き出した。アナキズムは現実の機械的、あるいは運動的解釈の上に立った宇宙観であって、その現象とは人類社会の社会とその経済的、政治的、道徳的問題とを含んだ自然全体を包括しているところのものである。その方法は自然科学の方法である。(注8)

それ故に無政府主義者は唯物論者なのである。(注9)哲学史の問題は唯物論か観念論かの問題に帰する。そしてわれわれの思想や観念や感覚でさえ、大脳および神経系統に対する物質の刺激お

よびその反射の一列であることは明らかにされている。大脳生理学はすでに心理学の領域だと信ぜられていることをさえ説明し得るに至った。物質が先か観念が先かという問題は、われわれが存在しないならば地球も太陽も宇宙さえも存在しないということ「われ想う、故にわれ在り」と言ったデカルトの有名な言葉によって示される一連の思想が全く誤りであることが明らかにされたと同時に解決された問題である。いうまでもなく、そして考古学、地質学、人類学等は人類の存在は地球の発生のはるかに後代で、ごく近代のものであることを証明しているのである。

バイブルが何と云うとも進化論がわれわれに教えた通り人類は猿類の進化したものであるということを反証すべき何らの材料もないのである。意識が物質的存在を決定するのではなく、むしろ反対に物質的存在が意識を決定するのである。

そしてそれ故に、無政府主義者はその理論を常に科学的方法によって建設して来たと同時に、その行動の方法を規定の社会の動向のなかから導き出して来たのである。アナキズムはたとえそれが日常闘争の中から発生したにもかかわらず、また同時にその理想を確立することに努力したのである。(注10)

それ故にわれわれはわれわれの理想、すなわち無政府共産社会がいかなる条件の下において実現されるであろうということに答えねばならぬ。

この問題をわれわれが解決しないならばいかなる戦略も確立し得ない。われわれはそれを次の三個の条件に要約することが出来る。

一、生産力の発展 二、資本主義の打倒

三、意識の変革

クロボトキンはその著『田園、工場、仕事場』の中で資本主義においては資本家の利害によって生産力とその充分なる能力を活動させる事が阻止されていること、すなわちその一例は資本主義の矛盾たる恐慌は、発展の過程において必然的に生起し、生産力を低下せしめることによって示されていること、この資本的妨害を取り除き得たならば、そして社会的な必要のために生産が組織されたならば、今日われわれの持っている生産力をはるかに今日よりも大となり、かつそれは今日の人類の必要を満たし得るであろうということを立証した。そしてマルサスの古くさい理論を打ち破ってしまった。(この場合の生産力とは機械の生産力のみでなく、その取扱いに關する技術、知識、改良のための研究等を含めている。クロボトキンはそれ故に手と頭の労働の結合を強調している)

生産が消費のために組織されているのでなくて、むしろ資本家が利潤を追求するために、すなわち生産手段の私有、商品の生産、利潤のための生産等々の方法に組織されていることは生産力発展を阻止する第一のかつ最大の原因である。

アナキーは豊富なる生産力を持たなくては存在し得ない。衣食が各人の欲するだけに充分にしているじて人間は他人を窮乏せしめることによって自己の安楽を要求する原因がなくなるのである。人間を全く善人と考えることも、全くの悪人と思う事も等しく誤まっている。社会組織が

物質的な諸条件が人間を善人にも悪人にもするのである。すなわち前述のごとく窮乏が社会犯罪の最大の原因である。

生産力を益々発展せしめるためには、その現実の妨害の条件をのぞかねばならぬ。妨害とは資本家の利益のための生産という方法である。

それ故にわれわれは第一に、資本主義経済、商品の生産、利潤のための生産、私有制等を一切撤廃しなくてはならないのである。しかもこれは議会主義者、社会民主主義者が夢想するような、議会の多数党となることによって、あるいは連立内閣によって平和裡に漸次資本主義の廃止に向かつて進むことは全く不可能である。

イギリス労働党や政権をとったあらゆる社会民主主義内閣が常に資本家に圧迫されて妥協し、あるいはその走狗と化した事実によって示されている。それ故に社会革命すなわち暴力を必然的に伴うところの社会革命以外に方法はないのである。無政府主義に対する攻撃の一つは、資本家的支配が打倒された翌日には見事にアナキーの理想社会が実現されるとわれわれが主張するのだと戯画化することであった。しかしこの反対に対して第一インターナショナル以来、最近に至って死するまで変ることなくアナキズムの宣伝と闘争と武装蜂起とのために活動したマラテスタはこの觀念に常に反対し社会革命は極めて長い間の闘争の累積であると主張して来ているのだ。^(註1)

再び繰り返すけれども、社会革命は長き間の闘争の累積である。旧制度、旧権力、旧生産關係が変革されて行くと同時に人々の間に浸潤して、決して崩れることはないと思われていた習慣や意識や觀念等の変革を意味する。これが一瞬にしてなし得るとは何人も考え得ないのであ

る。今日搾取され、窮乏し、何の自由をも持たない大多数者を一握りの支配者が支配していら
るの、法律的、武力的暴力たる国家強権を彼らが手中に握っているからばかりではなく多年の
強権社会のうちに育てられた奴隸的、保守的、屈從的精神によって大衆を国家が支配しているか
らに他ならない。

勿論、意識は社会の物質的存在の反映である。物質的存在が意識を決定するのであって意識が
物質的存在を決定するのではない。だから社会革命はいうまでもなく制度の変革とその反映とし
て急激なる意識の変革の過程である。その過程においては自由な自主的な独立的なそして進歩的
な精神が横溢するのである。^(註12)

だがそれが直ちに、一瞬にして古代からの保守的精神、新しきものへの嫌悪の心を失わせるこ
とは出来ない。それはやはり長い間の執拗な屈從しない闘争を必要とするのである。

これを要約するならば資本的支配の打倒のみが無政府が可能なるための条件たる生産力発展の
要因をつくり出し、意識を変革し得るのではあるがわれわれは資本家とその支配を打倒したその
翌日見事に理想的なアナキーが実現するというように簡単には考えず、むしろ反動に対する不
屈な執拗な多端なる長き闘争の過程が社会革命なのである。労働者農民その他被圧大衆は自己
を経済的、政治的抑圧の鉄鎖から解放し、また個人の自由すなわち社会を含めた自然法則を知
りそれに適応することによってのみ生まれるところの^(註13)の全き解放、「社会の成員の相互合意、
社会の慣例と風習の全体によってその成員の相互関係のすべてが規定されるように組織された社
会」を建設するためには、その第一条件として苦しみ多き社会革命の過程を戦い抜かねばなら

ないのである。これは好むと好まないとに因せず、資本主義の諸矛盾と科学の発展とによって持
ち来られた必然的な結論なのである。この目的(労働者農民の解放)のための手段は、それが
適切かつ有力であるならば、そのいづれをも拒否する理由はないし、またしてはならないのであ
る。なぜならあらゆる社会の運動や変化はそれ自ら人間の意識とは独立した一つの法則を持って
発展するものであるが、それは人間自らの活動をその中に含んでいるものであるからだ。無活動
のところには何の進化も革命もあり得ない。われわれはあらゆる正しい手段を尽くしてその目的
を追求しなくてはならない。

(三) 資本制の必然的崩壊

われわれはすでに一定の条件の下においては、無政府共産社会が存在し得ること、それ故にこ
の目標は一個の理想であり、決して空想ではないことを知ったのである。そこでわれわれはアナ
キーが何故人間社会の進化に政治的、経済的、道徳的向上発展の動向であるか、資本制は必然
的に崩壊し、階級なき搾取なき社会がその後続くかを究明しなくてはならない。

われわれはここで簡単に必然的という言葉についてわれわれの思想を説明し誤解を解明してお
こう。「必然的に資本主義が崩壊する」という言葉を「われわれ」無政府主義者が用いる時には
機械的のほったらかしておいて人間の活動を抜きにしてもという意味は全くないのである。なぜ
なら、社会現象はその生成をその崩壊の過程において、常に人間の活動を含めてるのである。
資本主義は幾多の矛盾があるけれども、その重要な矛盾として階級対立および階級闘争を含んで

いるのである。資本主義の進行の法則として階級闘争は必然的に生まれ、その闘争の中から革命的思想が発生し、かつ革命的思想は革命的勢力を拡大し、ついに社会革命に至るのである。もちろんかくのごとく簡単に段階的に物事は運ぶのではないが、常に動向にそった人間の活動が人間社会を変化させるし、人間の活動は社会の経済的情勢によって生まれた思想や観念や習慣によって決定されるのである。物質的存在が人間の意識を決定するのである。人間は単に欲するだけでは何事も出来ない。物質的存在に力を加えることによってのみ物質的存在の変化のうちにわれわれ自身を適応せしめその変化を実現する。クロポトキンは常に自己をかかるとの意味に用いていた。われわれは彼と共に言う、「われわれのなし得るすべてはその本質的傾向をおぼろげながら推測してそのために道を清掃することである」。

人間社会の進化発展の歴史は、その時代の生産力の発展が旧来生産関係との矛盾を激化することによって変革の時代を新しき時代に展開して来たが、それは一貫して強権的潮流と無政府的潮流との闘争およびその起伏の歴史であった。ある生産関係が存在する社会における生産力の発展は、支配階級の強権に対してその時代の物質的条件とその科学との条件の下における個人の自由を意欲する被支配者の闘争をもって色彩されている。古代国家の支配権が決して崩壊するとは思われなかつた時代においても、農業技術および手工業の発展は血統による民族制度の中に土地所有による身分的階級社会の萌芽を発生し、血統的束縛からの個人の自由を要求する奴隷の叛逆、例えばスパルタカスに引き入れられたローマの奴隷の叛逆を生んだのであった。

身分的階級社会たる封建制が農奴労働の基礎の上に建設されてから、手工業の発展、特に産業革命による機械生産が人間の社会に始められてからは、土地に農奴を縛り付けておくことは出来なくなつた。そしてフランス革命の輝しき先駆者の教権と王権とに叛逆した個人の自由の強烈な要求とそのため闘争が起こつて来た。しかしその結果はブルジョアジーに低賃銀のプロレタリアートを供給する結果となつたが、この個人の自由への意欲は一切の社会主義を生んだのであった。個人の完全なる自由、近代的アナキーを実現するための諸条件は未熟であつたが個人の自由のための闘争、無政府的潮流は著しく拡大されたのであった。

その上、強権的歴史家によって「暗黒時代」と名付けられている中世紀の諸都市の運動は、ローマ帝国の強権に対する自己の防衛として始まつたのであり、それは各都市の自主独立、職業の自由、住居の自由、防衛の自由のための闘争であつた。この中世紀における自由都市の活動は、農村との分離のために漸次諸王のために滅ぼされてしまつたけれども、その文化、科学、芸術等は輝しき文芸復興、産業革命の先駆であつた。

クロポトキンは正しくも、この中世紀における諸都市の歴史から、個人の自由の拡大するに従つてその文化、科学、芸術が発展し、強権が確立すること、その文化は画一的となり、その生氣を失つてしまふことを述べている。

もちろん一定の時代の文化はその時代の生産関係や制度の反映である。そして、その新しき時代が発展しつつある時における文化が生氣ある発展を続けるのは、発展時代の反映であると同時に、生命の多岐なる発展を表現し反映しているのである。これは変革とそれに続く発展の時代が

旧制度を倒し、個人の自由が旧制度に於けるよりも、より以上にしかも急激に拡大されたがために外ならないのだ。

ブルジョア的な個人の自由は資本主義の發展的時代の生氣ある文化を生んだのである。それは固定し、画一的となりそして生氣を失って来た。しかしその中にプロレタリアの個人の自由の意欲が生まれ、強烈となりつつあるのだ。それ故に人間の進化の動向は無政府的潮流の裡にある。

資本主義について、社会主義者が信じているところの公式は次のごときものである。資本主義は産業革命の結果として生まれた生産方法、生産関係について名付けられたものである。それは封建制の下における農奴を土地から解放し、都市へ多数の工場プロレタリアとして送った。そして一方には一切の生産手段とその生産物を私有し支配する資本家と労働力以外の何物をも持たない労働者との二つの典型的な階級をつくり出した。この両者の間には利害の一致は何物もなく、唯闘争以外の何物もない（この点は社会主義者の間にも一致していない）。なぜなら簡単にこれを示すものは次のごときものである。

一方はより多く搾取せんことを欲し、他はより少なく搾取されんとする者の間に一致を求めることは、一方が他方を力をもって犠牲にしてのみ始めて成立する。そしてこれは個々の資本家、あるいは労働者が好むと好まないとに因せず資本主義そのものの必然的な結果なのだ。

資本主義の一特質は商品生産の経済である。一切のものは利潤を獲得する目的物に、商品に転化せしめられる。商品はそれ自身利潤を生むべき方向に動くのである。なぜなら利潤を生まない商品、すなわちその価格を生産費の総和と同一あるいはそれ以下に切り下げることは商品を再生

産することは出来ず、商品は単に消費し尽くされるだけだからである。利潤は商品の価格が、その生産費の総和以上にならなければならない。商品とはかかるものを名付けるのである。

資本家は何の制限もなければ、利潤をあげるために出来る限り多量の生産を行なわんとする。機械の発達は低廉なる商品を大量に生産し得るに至った。利潤のみ追求する資本家はより安く、より多量に生産せんとして互いに競争することに必然的である。しかも生産費の低下は最も抵抗の弱い処に向けられる。それは賃銀の低下である。賃銀の低下は大衆の購買力の低下であり、それは再び資本へ結果として多量に生産した商品を消化し得ないで、集積することとなる。かくして恐慌が起こる。

資本主義における工業の発展は農業の犠牲によって行なわれることを特徴としている。農奴経済は全面的に農奴の生活を窮迫に陥れた。そして工業はこの土地から農奴を解放することによって、多数のプロレタリアを生産したことによって成立した。資本主義の発展期においては、多数の農民が都市へプロレタリアとして流入し、それが資本家に低賃銀の労働を供給したのである。需要よりも供給が多い時にはその商品の価格は低下する。それと同様に賃銀もプロレタリアが多数の産業予備軍を農村が持つが故に低落して行くのである。

恐慌は資本の集中の過程である。恐慌は大資本のうちに小資本を合同し、集中する大資本と小資本との闘争の過程である。そして中産階級のプロレタリア化の過程である。企業の合同によって集中した資本はトラスト、カルテル、あるいはシンジケート等を結成した。そしてあらゆる産業を少数の結合せる資本の手中に集中するに至る。そしてついには一握りの金融資本に産業の決

定的な部分が集中する。

資本の集中の過程は一方には依然として生産手段は私有されているけれども、その生産は大資本の生産、消費の統制となる。生産の無制限な無秩序な、消費を考慮しない方法が、大資本が利潤を獲得するという立場に立っての計画経済がこれにかわる。生産手段は私有制でありながらその方法は社会化される。

これは大資本の産業の統制であると同時に、消費者の立場の拡大強化を意味する。この私有制と社会化の対立は資本主義の矛盾をなおいっそう激成する。

恐慌は資本の内部に於ける大資本と小資本との対立と、利潤獲得のための闘争を曝露し大衆の窮乏化を促進する。階級対立は尖鋭化し階級闘争は激甚となる。計画的な方法による経済はますます生産手段の社会化を促し、ついには生産が大資本の生産手段の私有による、その利潤獲得のためではなく一般民衆の消費のために行なわれなければ止まらない運動を続けるのである。生産手段は社会化、即ち共有化されることによってこの矛盾は解決されるのである。

資本主義は国境を超越して地球上に分散する。発達の遅れた諸国は、その初期においては先進資本主義の市場であったが、漸次土着資本、あるいは外国資本によって資本主義化して行く。そして先進資本主義と後進資本主義との対立が始まるのである。

資本の集中の過程は一国的であると同時に国際的である。国際的に結合した金融資本の制覇の時代をわれわれは帝国主義と名付けている。

この時代は経済的には国際的に結合した金融資本が、政治的には諸国家の対立していることを

その一つの特徴としている。そしてこの状態は力的関係によってその安定性を脅かされ変化する。帝国主義の時代は列強により世界が再分割される時代である。主権の存在しない土地は地球上には一片もなくなり、植民地、半植民地は列強によってその勢力範囲が決定するが、それは列強の力的関係によって戦争によって容易に変化する。

これを要約すれば一方には生産手段を占有している少数の金融資本と大多数のプロレタリアおよび農民が対立する（これはわれわれとマルクス主義との見解の相違である。そしてそれは後述するであろう）。国際的に金融資本は結合しながら列強は鋭く対立し、不断に戦争の危機をはらんでいる。植民地を搾取する国民と植民地大衆とが対立する。生産手段は大資本の私有ではあるが生産は社会化される。

これらの矛盾はただ生産手段の社会化、共有によってのみ解決する。生産手段の社会化は当然生産物の社会化に至る。それは階級なき社会を意味する（この点に社会改良主義、社会民主主義とわれわれの対立がある）。これは必然的に社会革命の勃発を意味する。なぜならいかなる支配階級も、その支配権やその私有財産を暴力の強制によらなければ放棄しないからである。